

# 文化高知

'93年3月 NO.52



高知市立第六小学校 3年生 福留多佳子 (1991年)

# 「M & M」



## 北村 精男

九回の裏、1対0、ツアアウト満塁、ツースリー。打球七球目。またファール。ピッチャーも緊張のせいか顔が痙攣し、彫刻のように見える。打者もまるで仁王尊のように形相が変わっている。土壇場、大きな勝負であり、明暗の分かれ目である。バットが空を切った。空振り。打者は二、三歩下がるとバットをグラウンドに思いっきり叩き付けた。バットの先は土にめり込み、槍を二つ合わせたように先端に鋭い剣ができた。私はこの場面を観て思わず胸を刺された。

「M & M」(Man & Machine)の略。人と機械の融合・一体化を図ることで繁栄をめざそうという当社独自の新しい理念。当社ではこれをキャッチフレーズに全社的に運動を起こしている。この考え方の原点は「釘を体で打ってみる、手で土を掘ってみる。はたして出来るか、出来やし

ない」という所にある。仮に挑戦したとしても額からは血が流れ、爪ははげてしまうのは明らかだ。人と機械の不可分な関連がここから生まれる。

当社はサイレントバイラーという無公害建設機械を発明し、それを駆使して世の中に貢献をしている。社員はこの機械を使って仕事をし、妻子を養う。そして世の中のためになっていることを誇りに、日夜奮励努力し一日何十万円、何百万円と稼いでいる。大変結構なことであるが、人がいて、そして機械があつてという両者の共存の結果に他ならない。昨年のことだが、一年で一番忙しい二月に、全国で働いている社員全員を本社に集めた。そこで機械や道具などを何も使わずに稼いでみるかと提案してみた。「M & M」の考え方を本当に理解してもらうためのショック療法的なアプローチである。

機械なくして一円たりとも稼げないことは本人たちが一番よく知っている。しかしである。普段大切に扱われていないパートナー・機械たちが堪忍袋の緒を切らしたのである。「現場に残された俺は一体どうなるんでえ。俺だって世のため、あんたのために一日中精一杯頑張った。それなのに何のいたわりも、何の手当もしてくれない」と。そして「俺も優秀で自信は持っている。かといって人間に操作してもらわない限り自分一人では何もできない。しかしあんなだつて機械の力を借りずしては仕事ができないではないか」と。

当社の機械・工法も、それを使いこなす社員たちも素晴らしい。その素晴らしい技術を生かして日々の作業を行う。そして家に帰れば風呂に入り一日の汚れを落とし、活力源として刺身も食らえば酒も飲む。そして明日の英気を養う。それは結構なことである。しかし忘れてはならないのは、それを支えている機械の存在である。

「M & M」の方針の真髓を説明した後、レポートの提出を求めた。わずか五、六行を書くのに一晩かかった者もいた。私はその文章を読んで目頭を押さえた。皆、機械が大好きであり、自分の立場も十分分かつている。ただ余りに機械との関係が当

たり前になってついつい粗末に扱ってしまふ、というのが実情である。昔の船長は自分の船が沈没する時はもろとも海に沈んだという。まさに一心同体だ。何もそこまで要求するつもりはない。が、機械や道具を大事に扱いたわる心は、人間にとつて欠かすことのできない基本条件の一つである、と強調したいのである。打者にバットがなかったら、板前さんから包丁を取り上げたら、事務員さんにワープロやコピー機がなかったら。身近な例からも、機械や道具の存在がいかに大きいか分かるうというものである。

人間は石器を使うことから生活を始めた。そしてその生活文化をここまで向上させ、それに伴い次第だいに道具や機械を使う比率を高めてきた。しかし、人間社会の文化は人間の知恵のみで発達し押し上げていけるものでは決してない。知恵の産物である機械や道具が人間の思いを遂げてくれるのである。「M & M」——人と機械の融合は、まさにその核心を衝いたキーワードである。年末に見た当社の機械、工具は手入れが行き届き、満足げで嬉しそうであった。その上にそつと置かれた輪じめが一九九三年の繁栄を告げるかのようであった。

(株)技研製作所 代表取締役社長

# 悪童たちの浦戸湾

## 中城 正堯



あれは終戦も間近い、昭和二十年(一九四五)の初夏であった。高知市種崎の造船所も、アメリカの艦載機グラマンの襲撃にさらされ、民家にも被害が出ていた。

しかし、三里小学校三年生だったわれわれ種崎の悪童仲間、空襲警報もものは、夏を待ちかね、フンドシ一つで浦戸の浜で泳いでいた。種崎では、太平洋側を沖の浜、浦戸湾側を浦戸の浜と呼んでおり、小学二、三年生は、遠浅で波のない浦戸の浜で、まず泳ぎを覚えたのである。浦戸の浜は、豊かな魚介類の豊庫であった。カキの養殖棚が並び、冬には青ノリ、春にはアサリ、夏にはワタリガニ、そしてハゼやウナギなどが年中獲れた。それも手づかみか、ごく簡単な手作りの仕掛けでよかつた。つり竿など、まどろこしくして、使う気がしなかった。

極端な食料不足で、わずかな配給米を、畑でとれたサツマイモと浦戸の小魚で補って、食いつないでいた

のだ。家では勉強どころでなく、悪童どもは大つびらに浜で遊び、かつ食料獲得に励んでいた。

この浜に、巡航船が疎開してきた。高知の棧橋と、御豊瀬、浦戸、種崎を結ぶ動脈として大活躍をしていたが、空襲の激化で運休を余儀なくされたのだ。当時の子どもにとっては、あこがれの乗り物であり、絶好の遊び場になった。

背の立つぎりぎりの所から、必死で二、三十メートル泳げば、なんとか巡航船にたどりつけた。錨づなを伝わって船上によじ登ると、敵艦でも分捕った気分ではしゃいでいた。

ときには、はるか上空からブーンという鈍い爆音が聞こえ、空襲警報のサイレンが鳴り響くこともあった。しかし「なんだ、B29だ」と、平気だった。この巨大な重爆撃機は、瀬戸内、関西へと通過するだけである。怖いのは、警報を出す間もなく、バリバリッという爆発音とともに、

低空で急襲してくるグラマンである。造船所だけでなく、船も車も人も、機銃掃射の標的にされた。

幸いわが悪童仲間は、この爆音を聞くとすぐ海にとび込み、船べりに裸身を隠して、難を逃れた。それから五年後、朝鮮戦争勃発とともに、特需で金属が高騰、アサリ掘りならぬグラマンの葉莖掘りで、小遣い稼ぎができるとは、思いもしなかったが……。

七月四日夜の高知大空襲は、浦戸湾ごしに茫然と眺めていた。どの夕焼けより、空が紅く染まっていた。そして八月十五日の終戦を迎えた。種崎の浜にも、平和がもどってきた。しかし飢餓状況は、ますますひどく、ハゼ獲りの名人といわれた父とともに、せつせとハゼを獲っていた。

やがて浦戸湾にも活気がもどり、巡航船も運航を再開、つり舟や運賃船も行き交うようになった。こうなると、悪童どもはまた舟遊びがしたくなった。当時の浜の子は、今の自

動車へのあこがれと同じ思いを、小舟にいだいていたのだ。小遣いのため、悪童三人で近くの貸し舟屋へ行き、半日借り出した。なんとか櫓を押し、仁井田の舟倉へ着けた。ところが軍需工場に動員されていた旧制高校の居残り組につかまり、「ちよつとかせ」と、とりあげられてしまった。やつと返してもらったが、気がつくと櫓の先端がボツキリ折れていた。

黙って貸し舟屋に返してきたが、夕食はのどを通らなかつた。案の定、貸し舟屋がどなりこんできて、全てがバレてしまった。

故郷を思うとき、浦戸湾の海辺の光景がまず目に浮かぶ。そして、戦時中の苦しかった生活や悪業の数々も、今となつては懐かしいばかりだ。昨年末には、宗教戦争や民族運動でゆれるインド北東の町シロンに入る事ができた。危険だからと軍の護衛つきで、わずか一泊で追い出されたが、街角で見かけたゴミをあさるストリート・チルドレンの姿を忘れることができない。彼らもいつの日か、少年時代を懐かしむような日々が来るであろうか。

それにしても、あの種崎の浦戸の浜が埋め立てで消え去ったのは、残念でならない。

(株)くもん出版社長

# 子どもはなぜ描くのか

②

## 「自己主張」と「抑制」のバランス

濱田 美智

三〜四歳児の自由画帳には、円形から発生したさまざまな新しい図形を見いだすことができます。丁度、象徴期から前図式期にある彼等は、どのような絵を描くのでしょうか。まず円形にまつわる図形としては、図1のようなものがあります。

●円からの図形の誕生  
図1には、円形の内部に小さな円が内在する同心円や、円形を十字で分割したマンダラ図があります。

マンダラは「自己」の原型的シンボルであり、最も安定した図形です。確かに円と比較してマンダラは、左右上下に傾くことなく安定したフォルムであることが分かります。この時期にマンダラ図形が描けるのは、人間の自立をめざし一步をあゆみ始める、三歳児の内面の「自己確立」を象徴しているかのようです。さらにこれらの図形の全ては、大人に教えられて描くのではなく、彼等の内発的なエネルギーから自発的に描いてい

ることは全く驚異的なことで、円形よりエネルギーが放射状に外向かった太陽図形は、女兒の好んで描く草花の原型であり、また図1

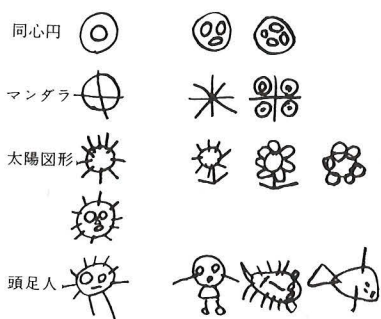


図1. 円形からさまざまな図形の誕生 (長坂光彦編著、絵画製作・造形、1977)

をみれば頭足人(Kopffüßler)につながっています。頭足人は人物画の前身で、世界中の子ども達が描きます。民族や習慣も異なる世界の子ども達が、このような共通した描き方をすることは、誠に興味深いことです。

●頭足人の出現  
円形や楕円形から二本の直線を引



図7. 頭足人



図8. アニミズム描法

置は無関係でバラバラに描くことが特徴です。丁度カタログ商品を並べたような描き方であるため、前図式期のことをカタクログ期とも呼んでいます。

手や耳を表しているようです。図8のように動物や小鳥・魚まで頭足人的な描き方で、このような描き方を「アニミズム描法」とよびます。つまり動物も太陽も樹木も一切の現象物に至るまで、自分と同様に生命が存在していると考えているからこのような独特な描き方ができるのです。頭足人には共通して、二つの眼を必ず描いています。出生直後の新生児が、母親に抱かれると母親の眼を凝視するという実験結果からも分かるように、人間の顔の中央の二つの眼は、子どもにとっても印象的な強い存在であることが分かります。

●基本図形の組み合わせ

このように前図式期には、彼等がこれまでに獲得した基本図形(○+□△)を組み合わせて、独自の図形を描くことが分かりましたが、その図形の一つ一つは独立し、空間や位

が一見して大体何を描いているのか判断できるようにになります。このため子どもの絵に対して親の干渉が始まる時期でもありません。感覚や知覚の鋭い子ども達は、すぐに母親からのサインを読み取り親の期待する方

き、円の上部の顔の部分に目口を描いた図形を頭足人と称しています。図2〜図8までは、三歳児の描いた頭足人です。表情のある個性的な表現から、周囲の大人等の干渉を受けて描いていないことが分かります。図2から図5の頭足人では、円や楕円が頭と胴体全体を表しています。

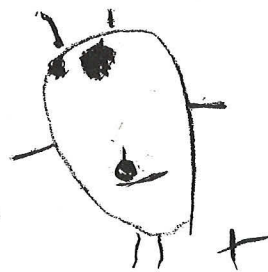


図2. 頭足人



図3. 頭足人

が、図5では、頭部と胴体を二分しています。さらに図6のように、異常に長く下に伸びた二本の直線は、足のみではなく直線の内部は胴体を含んでいることを意味しています。図7になると、頭部と胴体部は別別し、人物らしい表現となっています。また頭部から出ている二本の横線は、



図5. 頭足人



図6. 頭足人

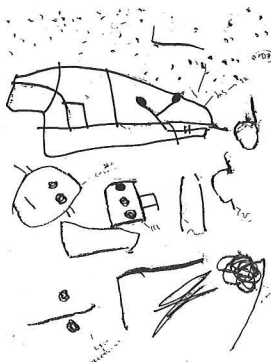


図9. 前図式期

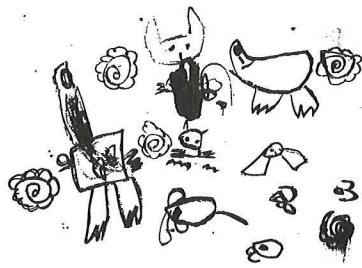


図10. 前図式期



図11. 前図式期の後期

とを知らせることが必要です。幼いなりに自分をおさえることも学ばせるのです。例えば人に迷惑をかけることは、小さい頃から一貫して教えてゆく親の躾が必要ですが、この期の躾は、大人の行動を模倣しながら育つてゆくことが中心となります。

乳児期から大人に十分に愛され、受け入れられて育った子ども達は、大人を信頼し、日々の生活は喜びに満ちています。子どもは日常的な親との関わりの中で、他人に対する信頼感や、自己の内部に自信が形成され育てられます。この精神発達こそ乳幼児期に是非とも育てなければならぬ人間発達の重要な課題です。

絵を描くことや、日常的な生活や遊びを通して、自分の「意志」により自分のことは自分でやろうとする「自立」への意欲を上手に育み育ててゆきたいものです。

(高知女子大学保育短期大学部教授)

# いかす！カツオ料理

堅田 正八(正蜂)



「弁当はフタの飯粒先に食い」  
こんな川柳がある。大正生まれの庶民がもっている、先天的な食べ物コンプレックスがそうさせているかもしれない。

生きるために「食う」この単純明快な生命維持の基本は、すべての動物が同じであった。ところが、万物の霊長と称する人間だけが、「食う」から「食べる」へと進化した。特に日本人の場合、高度経済成長の波に乗った食の驚異的な進歩は、「総グルメ時代」と言われるほどになった。最近では味覚に加えて視覚も要求される料理、まさに「食美芸術」であろう。

雑誌の料理コーナーに始まって、専門誌、テレビの料理番組、カルチャー教室、専門学校等々、飽食の日本はとどまるどころを知らない。私が、今年の「日本新語、流行語大賞」を狙って作った「グルメファッション時代」が、案外的を得ているかもしれない。

ところで、先年戦友会で来高したその筋の猛者連が、「高知の皿鉢料理は、話に聞いていた

よりずっと凄い。土佐人の豪快さに舌を巻く料理だ。それに、新鮮なカツオのたたきは、地元ならではの最高の味、大いに満足」、これには鼻を高くしたものである。

カツオは土佐の顔。そこで、今日はカツオのちよつと変わった料理を紹介する。廿代町の小さな店「魚〇」。長い付き合いの店で、経営者兼板長のAさん、「近頃は、やれビタミンだ、ミネラルだ、塩分は何%以下に、ガンに罹りにくい食べ物。食物繊維は欠かさないように等々うるさいですね」。それにお客さんの口が肥えていましてね。こんな中で、ちよつと変わったカツオの一品を作ってみました。酒のおつまみにも、下戸の方にはお薬として最高です。何よりもご家庭で簡単に出来ます。試食してみてください」と言う。

なるほど、これはいかす。それ以来カツオがますます好きになって、度々立ち寄っては舌つづみをうっている。

まず、「カツオのニンニク焼き」、厚切りにした刺身を、しょう油、みりんにひたし、これをサラダ油でたたき程度に軽く焼く。ニンニクの薄切りと、玉ネギをサラダ油でいためたもの。さゆりの薄切りとトマト、これらをきれいに盛りつけ、別に作っておいた「タレ」(レモン汁、しょうが汁、酢少々、サラダ油のまぜ合わせ)をかけて、ハイOK。

次に、「らっきょうのソース煮」。厚切りしたカツオに、塩こしょうをして小麦粉をまぶす。フライパンにバターをとかして両面をよく焼く。バター焼がみそ。らっきょうの甘酢漬け薄切りのせ、白ワインとスープを加えたものをかけ

飽食の時代と言われるかわら飢餓で苦しむ民族や難民に心が痛む。

豊かな食文化の営みのできる土佐に生まれ住んで、幸せに思う毎日です。

(高知競輪競馬労働組合)

## 潮騒の香り、土佐の味

岡山 知世



クセのないその味を何かにたとえようと思案していたら、

「ちよつとゴボウに似いた味やろ?」  
とカウンターの向こうからおかみさんの声。

「ときわ」のご主人が目の前で揚げてくれるアツアツの「浜アザミの天ぷら」は、一度食べたらやみつきになってしまうシロモノだ。塩をパリとひとふりしてパクッ。「えっ、何これ?」が、多くの初心者、第一声にちがいない。

聞くところによると、おかみさんのお里が室戸の方で、この浜アザミはそちらから直接取り寄せているとか。山芋のように奥深く生えていて、おかみさんが小さい頃は、シャベルを手に砂浜へよく掘りに行ったそう。

三分間弱火で蒸し煮する。パセリなど添えて盛りつける。変わり風味のカツオ料理。まことにケッコウです。

(あたご川柳会会長)

## ねたは海の幸、山の幸

竹村美也子



土佐は美しい海と山に囲まれ、自然の恵みも豊かですが、若い頃、夫の仕事の都合で数年間他県で生活した時には、食べるものに苦労しました。

今、世はまさに飽食の時代、「よさこい節」の一節ではないけれど、おらんくの池には汐吹く鯨が泳ぎよるし、脂ののった鯨のたたきのおいしかったこと。しかし食肉用としての捕鯨が禁止され庶民の口にはめったに入らなくなった。土佐料理「司」で鯨の「さえずり」というのが味わえる、これがまた、味噌だれでやわらかく、とろりと口にすべり込む、まっことおいしいぞね。「さえずり」とは鯨の「舌」である。

県外の友人が来高した時、「うつぼのたたき」をご馳走したことがある。話をした時は「エッ、

「生のままでも食べられるよ」と言って、白い、十五センチほどのアザミの芽を出して下さった。シャリ、シャリと野生の音。なるほどゴボウに風味が似ているが、ゴボウよりずっと柔らかくて美味。花の咲く夏季以外ならたいい店に入るそう。日曜市にも並んでいない、このおいしいものを初めて食べた日は、なんとも得をした気分、悦に入ってしまった。

この魚料理を目当てにやってくるお客さんも多いようだ。普段食べ慣れたものを、ひと工夫して出してくれる。「鯉の酢じめ」もその一つだ。たたきや刺身で食べるより、ずっと薄くスライスしたものを皿に放射状に並べ、たっぷりの酢醤油をかける。それに青じその織切りとニンニク。これがまたさっぱりとしていていける。このタレは、お鍋をする時のポン酢と同じ作り方だということだった。ごく家庭の味なのに、うちで同じ味を出せない微妙さは何だろうか。「ときわ」のご主人の手で料ってもらえたら、魚たちもきっと成仏できるにちがいない、と思った。

ちよつと箸休めの変変わったものだと、「梅干しの甘露煮」。梅を煮るのでなく、あの塩づけした梅干しを砂糖で煮るのだそう。果物のコンポートより甘ったるくなくて、上品なまろやかさがある。それにしても、ご主人の柔らかい発想には敬服してしまう。

「大したものはないけど」と謙遜されるご主人。ほろ酔いと満腹とぬくぬくの気持ちで「ごちそうさま」を言わせてもらえるのだから、これはやはり、大した料理でないわけがない。

(学生)

うつぼって海に泳いでいるへびやないの」とびつくり、私は「そうよ、それがおいしいのよね、ちよつとこりこりして、戸波が本場でそのたれが最高、今度来た時絶対食べらさき」と約束、食道楽の彼女は舌つづみを打った。

最近、若草町に戸波の人が仕出し屋さんをやりので本場の味が楽しめる。

山の幸にも恵まれ、子供の頃よく裏山に登り山イチゴやイタブの実、クワの実をおやつ代わりに食べたものである。塩を持って山に行きその場でイタドリの皮を剥いで食べ、山を降りる頃お腹がすいてしょうがなかった。今にして思えばイタドリに消化を助ける成分が多く含まれているとのこと、うなずける話である。このイタドリも土佐ならではの食べ物、春は毎年山好きの友達と大きなリュックを持って高速を走り他県にまで採りに行く。皮を剥ぎ塩をしてビニール袋に入れ冷凍庫に保存すれば青く新鮮なまま保てる。料理法もいろいろあるが、塩でなじんだのを笹切りにして、水で塩抜きしフライパンで水分を切り、塩・調味料等でサッと油炒めしてそれをすばやくウチワで扇いで冷やす。するとイタドリ本来のパリッとした歯ごたえを失わず、あっさりとしておいしい。作ってみかね。

山ウドも洗ったものを短冊に切って生のままみりん、砂糖醤油で少々甘めに味つけて油でやわらかくなるまで炒める。これがまたおいしい。

土佐にはとにかくうまいものがいっぱいある。生のいいサバの姿寿司、柚子をきかしたウルメの姿寿司も土佐ならではのもの。

# 音楽活動とともに

橋本 憲佳



大正生まれの私は当然ながらあの第二次世界大戦末期に現役兵として入隊、直ちにソ満(旧ソ連と旧満州)国境最北端守備隊に配属。その後幹部候補生として北支派遣部隊に転属。十カ月後、見習士官として再びソ満国境に戻り国境守備。その間九死に一生を得て帰国することができたのは誠に僥倖と言わざるを得ません。冬は酷寒零下三十五度のソ満国境、夏は灼熱の中国戦線で苦勞を共にしてきた多くの戦友達が祖国のためにその尊い生命を捧げて散って逝かれたことを思う時、生き残った者のなすべきことは何か。それは唯一つ、一刻も早く祖国再建のために立ち上がり、身命を賭して働くこと。その使命感が全身に漲っていたことは申すまでもありません。

こう考えたのです。即ち、敗戦国民の、心身共に荒廃しきったこの人達にどのようなしたら潤いを与え、国土再建への意欲と希望を持って貰うことができるのだろうか。そして、今の自分に何ができるのかと。結局、今のこの自分にできることは音楽以外にはないのだ、ということでした。そうこうしている内に、いつとはなしに志を同じくする文化系の同僚先輩達が二人三人と集まり、ここに戦後高知県初の『高知文化連盟』なる組織が誕生したのです。時に昭和二十年も終わりに近い初冬の頃、この運動が渦巻きの中心となり、その輪はつきつきに県内各地に広がっていききました。中でも、その中心となつて尽力されたのは、既に故人となられた田村牧夫氏と尾崎松芳氏のお二人で、それぞれ専門分野(文学・演劇・社会等)の講座を、市内で焼け残った小学校の教室などを借り受

けて各部門毎に始められたのです。では、音楽部門で私が取り組んだ戦後初めての『合唱団創設期』について話を進めることに致しましょう。一般市民を対象に私が合唱指導を開始したのは、実にこの『文化連盟』活動がその源だったのです。忘れもしないその年(昭和二十年)の十二月十日月曜日、その名もいかめしい『南方文化建設連盟音楽科コーラス部』。応募者二十三名中、十四名の出席者をもって結団、希望に燃えたその第一声。ここに文字通り呱呱の声を上げたのです。

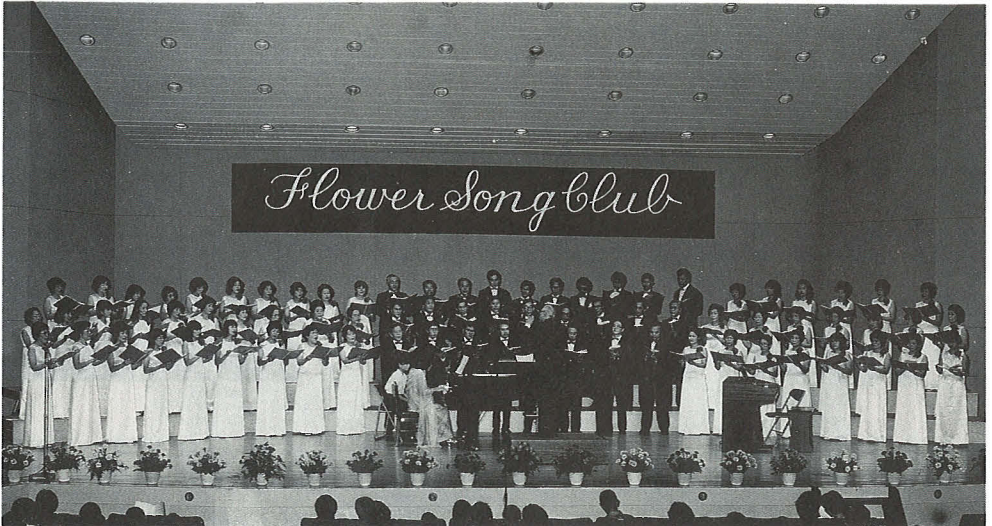
週一回の練習ながらその腕(声)もめきめき上がり、当時、高知にはこの合唱団以外になかったためか、方々から演奏の要望があり、交通手段の極めて不便な中にもかかわらず、郊外の学校や須崎、大杉等にもよく出掛けて行って演奏したものでした。その当時、高知は英軍や豪州軍の占領下にあり、朝倉(現高知大学キャンパス)に駐屯していた英軍に招かれ、朝倉小学校講堂で「ヨハン・シユトラウス」のワルツなどを演奏したことを思い出します。

なつたとのこと。『NHK高知放送合唱団』の名称はこの時を最後に完全に消滅してしまつたのです。その後の地方文化活動の発展のためにも甚だ残念なことだと言わざるを得ません。しかし、短期間とはいえ、それまでの活動は相当なもので、月一回の定時放送の他に四国管内中継放送(管中)、さらに全国放送(全中)と、その出演回数は当時既に九十回を超えていました。その後「フラワーソングクラブ」と改名されてから昨年までのラジオ・テレビの総出演数は、百三十七回に達しています。

が、この「フラワーソングクラブ」の名称だったのです。時に昭和二十年、この「フラワーソングクラブ」が、ここにはフラワーソングクラブというクラブもできたのかネ」と言われたと、藤本氏が話してくれたことがありました。(逸話になりますネ、これは！) さて、このクラブも今年で、はや四十八年目を迎えました。その間日本国内は東京・大阪を始めとし、各主要都市は勿論のこと、遠く欧米・東欧諸国・中国方面からまで招聘を受け、現在まで既に五度にわたる海外演奏をこなし、些かなりとも民間国際親善使節の役割を果たし得たことに大きな喜びを感じています。

聴衆の中から突如、黒人の男女の一人が舞台にどっと駆け上がってきて、驚いている我々の手を握りしめ、眼から大粒の涙を流しながら私達をしっかりと抱きしめてくるのです。かつて多くの黒人奴隷達が、家畜にも劣る悲惨な生活から逃れるために天国を夢み、死を願って歌つたのがこの黒人霊歌だったので。このような彼等の悲痛な叫びを、遠く地球の裏側からやって来た肌の色も言語も異なる人達が歌ってくれた。そのことに彼等は大きな感動を受けたのです。そこに居合わせた一人の白人が言いました。「MUSIC IS UNIVERSAL」と。

あと二年で創立五十周年を迎えます。皆様より頂きましたご厚情に対し衷心より深く感謝申し上げますと共に、今後共なお一層のご指導を賜わりますようお願いして「私の昭和」を終わらせて頂きます。



フラワーソングクラブ定期演奏会

四年、かつて吉田首相が来高された折「高知でクラブと名のつくのは口私共の最後のステージで演奏された黒人霊歌が終わるや否や、満員の

また、氏がたまたま私共の演奏会に来られた折、女性団員がそれぞれ思い思いに生の花を胸につけて演奏している華やかなステージをご覧になって、何かこの服装、この演奏に相応しい名称はないものか、という

# 高知の山と森 (六)

## 手箱山と筒上山

西村 武二

手箱山、この愛らしい名前の山は高知県内にある山の中では最高峰である。笹ヶ峰や三嶺はもっと高いのだが、いずれも愛媛や徳島との県境に連なる山である。県内最高峰でありながら瓶ヶ森方面から眺めてもあまり目立たない山である。石鎚山系の中では訪ねる人も少ないいわば不遇の山ともいえる。しかし本川村の長沢ダム湖畔から仰ぐとどうだろう。これが同じ山だとはとうてい思えない。冬の早朝、深く沈んだ谷間の上に雪をかぶった頂上は朝の陽光に赤く染めだされ、その山容は富士に似て端正で神々しいばかりだ。

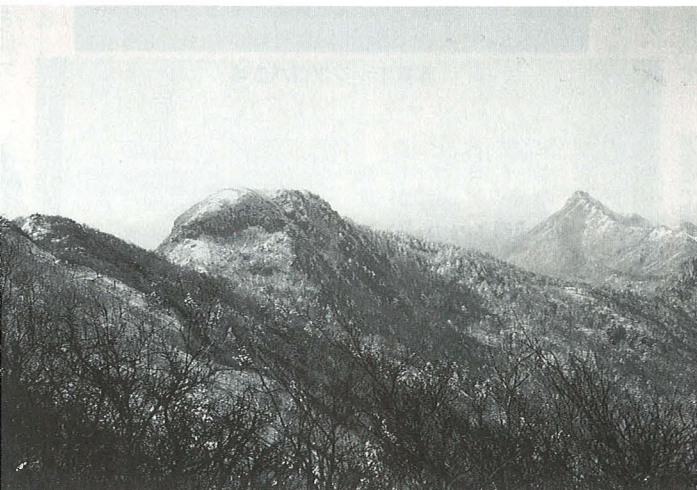
またこの連載の一回目で記したように、香長平野の東部でも手箱山が見えるのだ(実はそこから石鎚山もシルエット状に見える)。特に石鎚山系に降雪のあった後などは、黒い北山連山の上に際立った白い頂稜が

望まれ、平地の私たちにも親しい山である。日本の植物学の黎明期、新種発見が競われていたころ、手箱の名前を冠したテバコマンテマ、テバコワラビ、テバコモミジガサが新種として次々と発見された舞台でもある。そして手箱山は何よりも氷室の伝承で有名である。江戸時代中期、一七五一年二月から翌春まで一年あまり、本川郷寺川に山廻役として駐在した春木次郎八繁則は、在任中に見聞した事を城下の旧知に送る手紙の形にして『寺川郷談』を著した。それに「手箱山と云御留山大山也。此山に雪屋と云所あり。いわゆる氷室也。むかしハ毎年雪を詰し所也。忠義君の御代(二代藩主、一六〇五〜一六五六年)迄、毎年六月朔日に此雪屋の雪を取て壺に納め、夜送の早飛脚にて雪を献上

けるとかや。(中略)今ハ止りて其事なし。年内より詰置ハ年中消る事なくありしと也。氷室の跡猶今にあり」とある。その雪屋と伝えられる所が一九七三年十月に発掘調査され、屋敷跡や出土した種々の遺物から、ここが藩政初期の氷室の番所と認められた。そして今、一昨年より越裏門・寺川村おこし協議会の人たちによって氷室祭りが企画され、山道が整備され、氷室の再現が手箱山中で行われている。

通勤の途中に見るその雪に誘われて、この一月の末、快晴の日を選んで寺川から氷室への道をたどり、手箱山に登ってきた。寺川の大瀧(おおたび)展望台の少し上流が登山道の入口である。大瀧は折からの寒波で凍り付き、巨大な水柱が沢山つらなり下がっていた。対岸に渡りスギ、ヒノキ林の中を黙々と登り、手箱谷を隔てる尾根に登りつく。ここから先は忠実に尾根筋をたどればよい。右手北側には葉を落とした木々の樹間から雪をまとった伊吹山、子持権現、瓶ヶ森から東へ伊予富士へと県境に連なる山々が望まれる。左手手箱谷側はヒノキの人工林で眺望はきかない。やがて左手のヒノキ林もブナ林と変わり、尾根をそれて、手箱谷側の斜面を登

ジロモミの林を抜けると、一面雪で覆われた広いササ原の手箱山東斜面に出る。わかんの紐をしつかりと締め直し、直射光と雪面で反射された陽光を全身に浴びながら急に重くなった雪をラッセルし、あえぎあえぎ斜めに登って行く。ここが下界からよく見える雪の斜面なのか。やっとの思いで横断を終えて先の尾根に取り付き、門のように立ちはだかる岩の間を登りつめれば、手箱の頂上である。目の前に今まで見えてこなかったドームのような筒上山が現れ、その右手に石鎚山が雪もまとわず黒々とした尖峰を空に向かって突き上げている。見慣れた石鎚山とは違う山容だ。筒上山は寺川郷談には次のように記されている。「寺川躑躅尾(ツツジオウ)のほり筋尾(薊尾か、アザミオウ)の上、矢筈の森へ二里ばかり。秋のどかなる時のほり四方を眺望すれば、坤(ヒツジサル、南西)に当り予州大洲、それより南海を見越し、むかふに九州豊後、日向、乾(イヌイ、北西)に予州今治、西



手箱山頂から筒上山(左)と石鎚山(右)を望む

るへく見ゆる好景也」この山はかつてはツツジオウと呼ばれていたようだ。オウは峰、丘、尾根の意味であろう。したがってツツジオウはツツジの峰の意味か。なるほど頂上にはコマツツジの群落がある。

外崎光広著  
**土佐自由民権運動史**  
定価二、八〇〇円  
清達 幸男(高知レポート5)  
**高知県の工業**  
定価一、〇〇〇円  
土居重俊監修  
高知市文化振興事業団編  
**土佐弁 土佐日記**  
定価一、〇〇〇円  
岡林清水著  
**高知県文学散歩**  
定価一、八〇〇円  
高知の文化を考える会編  
**高知の文化を考える**  
定価一、二〇〇円  
高知市文化振興事業団編  
**わがまち百景**  
定価一、二〇〇円

高知県緑の環境会議森林研究会編  
**高知の森林**  
定価一、五〇〇円  
筒井広道著  
**画帳の歳月**  
定価二、〇〇〇円  
上森千秋著  
**流れと波の科学**  
定価一、五〇〇円  
土居重俊著  
**土佐日記** 付方言土佐日記  
定価一、八〇〇円  
土居重俊、浜田数義編  
**高知県方言辞典**  
定価六、〇〇〇円  
高木啓夫著  
**土佐の芸能**  
定価四、八〇〇円  
清水孝之著  
**中山高陽**  
定価三、八〇〇円  
外崎光広編  
**土佐自由民権資料集**  
定価三、〇〇〇円\*

今井嘉彦著(高知レポート2)  
**河川はよみがえるか**  
定価一、〇〇〇円\*  
\*は税抜き価格です

ある。アザミオウは手箱山北面の平坦地の地名で、アザミが茂っていた所なのだろう。かつて山番所がおかれていたという。矢筈の森とは筒上山と手箱山の尾根筋が矢筈のように切れ込んでいるので、その山腹の斜面一帯の森を指すのであろう。このツツジオウが、明治新政府のもとで全国の地図が整備されて行く過程で筒城山、筒上山と当て字され、元々の意味が失われてしまったようだ。石鎚山系の主稜線から南に外れ、その上独立したドーム状の山なので、頂上からの眺望はこの山系随一である。春木次郎八繁則はこの山に登り先の記述をしたのであろう。

筒上山には土小屋から県境を南下する森林の道が薦められる。岩黒山の西斜面のウラジロモミ林を通り、林が切れるとササ原が広がって眺望が開け、石鎚の尖峰を眺め、筒上山東斜面のブナ林を通り、花期を選べば、ヒカゲツツジ、シヤクナゲ、ゴヨウツツジ、キレンゲシヨウマなどがそれぞれの時期に楽しめるコースだ。私はこの道ほど森林の整った美しさを見せてくれる所は、この山系には他にないと信じている。歩くことを厭わない人は、ぜひこの道を歩いて森林の雰囲気にかたまってもらいたいものだ。

(高知大学農学部助教)

# スロバキア

永野貴代美

今年一月一日、チェコ・スロバキアの分離独立の様子は、日本のテレビでも大々的に放映された。チェコ、ブラハの熱狂的ともいえるお祭り騒ぎに比べて、スロバキア、ブラスチラバに集まった人々の表情は冷静で、喜び半分といった印象を受けた。

もともとスロバキアの一千年余にも及ぶ被支配の歴史を考えれば、「独立」という問題に直面した時、喜びの一方で不安が広がるのも十分納得できる。

スロバキアの街は、どこもこじんまりとして中世の田舎町といったところ。首都ブラスチラバも同様で、石畳と緩い坂道の落ちついた佇まいだ。旧市街地の入り口には十五世紀に造られたと言われるミハエル門が建っており、かつてこの辺り一帯に城壁が築かれていたことを彷彿させる。

この門をくぐり数分歩くと、大司教邸、旧市庁舎に囲まれたジプロバ広場（写真Ⅰ）に出る。



写真Ⅰ ジプロバ広場

この辺りはブラスチラバでも中心街と言ってもいいと思うのだが、訪問が土、日曜日だったこともあってか、見かけた人の数は二十人にも満たなかった。

スロバキアは元来、農業国である。特にワイン造りが盛んで、ブラスチラバ東隣のリトル・カルパシア山脈の斜面にあるベジノクは古くからの

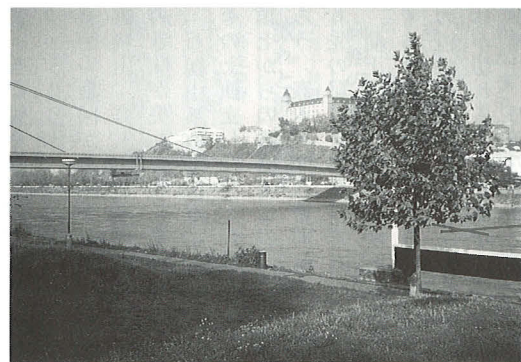


写真Ⅱ ベジノクの町

ワイン造りの町だ（写真Ⅱ）。

四世紀ロマン時代には既にワイン造りが始められたと言われ、大モラビア帝国時代、モラビアの女王とボヘミアの王の結婚式用にこの辺りのワインが用意され、この時初めてブドウの苗が女王の手によってボヘミアに持ち込まれた。ハンガリーにワインが伝えられたのはずっと後、一二九一年ハンガリー王国統合以後のことである。

ブラスチラバの南を国境に沿うようにドナウ川が流れる。ドナウに架かる橋を渡りウィーンに向かう。ウィーンまではバスで一時間程だ。ドナウ川を挟んでブラスチラバの町を眺めると、高台に四隅に塔のある、



写真Ⅲ ドナウ川とブラスチラバ城

ちよつと変わった形のブラスチラバ城が見えてくる（写真Ⅲ）。さらに進むと、木々におおわれた公園が視界をさえぎる。この川の緩衝地帯に造られた公園に、かつての共産国時代には、オーストリアとの国境に高さ四メートルもの鉄条網が張りめぐらされていた。この柵を越えて何人も人が川に飛び込み亡命を試みたそうだが、皆、捕えられたり銃殺された。

国境には、かつてはスロバキア兵士が出入国に目を光らせていたが、解放を機に、今度はオーストリア側が大量の不法就労者に頭を悩ませ、スロバキアの方を睨んで監視が立っているというのも皮肉なものだ。

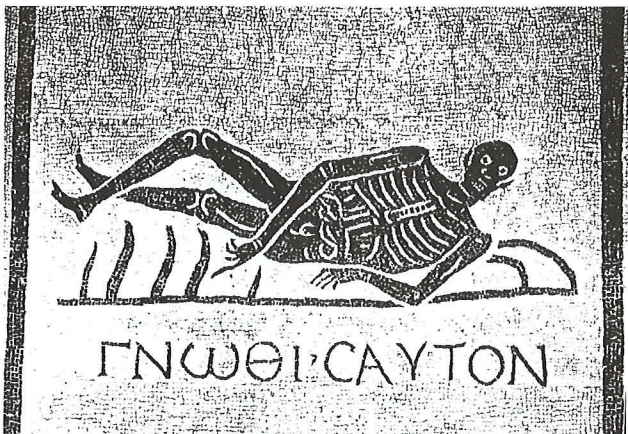
# メメント・モーリ(死を思え)

浜垣 仁

私は、看護学院で医学概論の授業を受け持っています。ここ数年、授業の最初の時間に生徒にアンケートを渡し、「死」について書いてもらってきました。この回答には、「今まで考えたことがない」、「こわい」、「できれば死んで行く人に会いたくない」というのが多く見られます。二十代の若い人ばかりで、まだ看護婦さんの卵なのですから、当然のことかもしれません。まして核家族の中で育った若い人には。

私が死というものを、また別の視点から考え始めたのは、何年前かのイタリア旅行からだと思えます。その時見て歩いた中世の教会には、聖者の遺骸が格子の向こうに安置されて、蠟燭のわずかな明かりの中に浮かび出していましたし、カタコムベという地下の埋葬室には、無数の頭蓋骨がうす暗い土の壁をくりぬいて置かれていました。そこでは千年以上の時を経て、なお現代の人間に死の重さを訴えかけているようで、死が今なお残る中世の風景の中に、いつしかうずくまってしまうように思えました。それはカルチャーショックとでもいうべき大きい驚きでした。

西欧中世の人は、「メメント・モーリ



モザイク：テルメ国立美術館（サン・グレゴリヨ修道院出土）

リ(死を思え)」という言葉を残しています。人生の根本問題は「死」であるという厳粛な事実を忘れないこと、それがどんなに恐ろしくても直視しなければならぬことを教えているように思うのです。そして、当時の絵画・彫刻には一見おどろおどろし

く見えるしゃれこうべが表現され、室内の装飾、プローチやペンダントにさえ使われたといえます。中世全体を通じて、平均寿命は三十代の後半から四十代であったとか。このような状況下では人々はいつも死の足音を聞き、病気になると思う死を思

い心の安んじることがなかったことでしょう。さらにこのような思想が信仰と結びつき、「往生術」となって流布し、死の苦悩を前もって心得ておくように学んだのでしょうか。また私は、最近わが国でも大体同じ時代に同じような思想があったことを知りました。中世の仏教復興者といわれる高僧達の著作や、少し下つては『徒然草』などです。そこでは死について習うこととか、生の無情が説かれています。

さて、現代の死は、その様相が大きく変わりました。まず交通事故による突然死の増加、自宅から病院へという死に場所の変化、そして人工呼吸器などによる管理された死の増加です。現代医学は難しい疾患を治療しようと努力していますが、その一方で病む人という「人間」がなおざりにされているという傾向がないとは言えません。このことは、第一線で医療にあたる者の常に心すべきことだと思えます。

臨終の方の傍らにある私たちは、そこで多くのことを感じ、経験し、学んでいます。そしてその人の死(裏をかえせばその人の生)を支え、その人の人生と死の尊厳を感得できるような精進することも、私たちに課せられた大きい使命であろうと思えます。(医師)

# ムラサキツバメ

—おしくらまんじゅうで冬ごし—

吉松 靖峯

ムラサキツバメはツバメという名前がついているが、鳥ではなく、シジミチョウ科に属する小型のチョウである。

分布は、日本国内では九州、四国、本州の近畿地方以西、日本以外では台湾、マレーシア、インドネシア、ミャンマー、ベトナムなどが主な産地となっており、南の国のチョウと言える。

翅裏は褐色で地味な色合いであるが、翅表は雄では外縁部を残し暗紫色の光沢があり、雌では鮮明な濃紫色の斑をもっている。

高知市内においても、庭や公園などでも見ることが出来るが、筆山や高見山まで足をのばせばたくさん見ることが出来る、大変身近なチョウの一つである。

日本のチョウの多くは、卵、幼虫、蛹の形で冬を越すが、ムラサキツバメは成虫で、しかも集団で越冬する珍しい習性を有している。

集団越冬は十一月頃から、三月頃まで見られるが、大きな木の数枚の葉だけに集団をつくるため、越冬場所を見つけることは、なれないと大変難しい。

越冬には、ツバキやカシなどの常緑広葉樹が利用されている。三十〜五十頭の集団となり、おしくらまんじゅうをしているように互

いに体を寄せ合い冬越しをする姿は、大変ユーモラスでもある。

私がこのチョウの集団越冬を初めて観察したのは、昭和四十五年十二月二十五日屋久島においてであった。この時には、海岸近くの民家の庭に植えられていたバナナの葉に三十頭ほどの集団をつくっていた。そつとチョウに触れてみたが、全



ムラサキツバメ '93.2.6 土佐市北地

く飛び立つ気配はなく、葉をゆすると全部がバラバラと地面に落下し、大変びっくりしたことが、記憶に強く残っている。

真冬であっても、気温の高い日には、チョウに触れたり、葉をゆすつたりすると、いっせいに飛び立ち、どこかに飛び去ってしまうが、越冬していた葉には、チョウだけに分か

る何かマークが付けられているのか、三〇分ほどすると、元の葉へ次々と帰ってくるのが見られる。

遅れて帰ってきたチョウは、集団のすぐ近くに止まったり、すでに止まっているチョウの上に止まったりするが、すぐに他のチョウをかき分け、集団の中にもぐり込もうとする。もぐり込まれる側は、足をふんばって中にもぐり込ませないような行動をするなど、見ているだけでも大変楽しくなる光景が見られる。

写真の場所は、土佐市北地であり、民家のツバキの葉に三十頭ほどの集団が見られた。

昨年の十二月の終わりの頃には、翅に少し触れても全く飛び立つ気配もなかったが、本年の二月六日には、最高気温が十八度近くにも上昇し、集団から一つ二つと飛び出し、付近の葉に止まり、翅を広げ、日光浴をする姿が見られた。

南国土佐とは言え、南方系のチョウにとつて土佐の寒さは大変厳しく感じているかもしれない。

このチョウは、シリブカガシや、マテバシイなどのブナ科植物が食料として知られており、これらを庭や公園に植えることにより、これらを楽しめそうである。

(地方公務員)

## 文化のひろば ⑦

### 生涯学習の拠点

#### —香我美町立図書館—

南に土佐湾をうけ、東西に約三キロメートル、南北に二十キロメートルと細長い町、この山と海と町との調和のとれた香我美町に、県下で一番新しい図書館・香我美町立図書館がある。

町内徳王子地区の小山をカットした丘陵地に、町民会館、トレーニングセンター(室内体育館)、野外グラウンドとともに設置されている。

図書館を一つの施設と考えることなく、町民会館との間の空間を中庭とするなど、一帯を一つの憩いの場として構成している。

香我美町は昭和五十九年、高知県教育委員会より「生涯学習モデル市町村」として指定を受け、生涯学習の観点に立った教育の推進を図りながら、二十一世紀に対応できるまちづくりをめざしているが、図書館はこの生涯学習を進めるための拠点、また文化活動の拠点としても位置づけられている。

現図書館の前身は、昭和五十五年四月に設置された町民会館の図書室。

その後、教育委員会が行った町民アンケート調査において、町民は意外と本を読んでいるという意識が分かり、まず次代を担う子ども達を育てるという意味からも、専用図書館の建設にふみ切り、平成三年五月にこれをオープンした。

建設にあたっては、町民の中で自主的に「図書館を考える会」が結成され、建設の位置や運営等について随分と論議を重ねた経過ももつ。

少し変わっているのは、建設費に工場再配置促進法による通産省の産業再配置促進補助金を導入していること。これは、町が同地区に三菱電機(株)高知工場を企業誘致したことによる。

館の構造は、鉄筋コンクリート二階建、延床面積六五九・一平方メートル、全体をベージュ色でつつみ、特に南面にガラス窓を多く配し、明るい建物となっている。

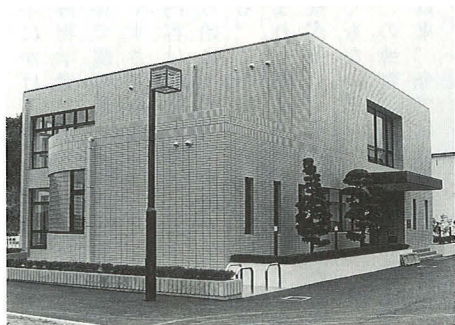
一階は開架書棚、閲覧室、子どもコーナーなど。採光満点のこどもコーナーには、小さなテーブルにイス、

三色のソファがあり、子ども達には楽しい部屋となつて、次代を子ども達に託そうとする意向がくんでとれる。

二階は展示ホールと常設の歴史資料室があり、ロビーは訪れた町民がゆっくりとくつろげるソファと大画面テレビが配置されていた。

また、県下で最も新しい図書館とされるだけに、当初からコンピュータを導入、貸し出しについても各自に登録を行ってもらったうえで貸し出しカードを発行、著者や出版社だけで即時に希望の本が探しだすこともできる。

さらに、貸し出ししている図書がいつ返却され、いつ貸し出しができるなど手際よく案内でき、利用者サービスにもつながっている。



香我美町立図書館

図書室時代の約七千冊であった蔵書数も現在約一万三千冊、年間三百万円という図書購入予算にも、意気込みが感じられる。

また、このところの利用者層をみても大人から子どもまで幅広く、町民の中に良く浸透してきていることもうかがえる。

専任職員は、司書の松林さんと事務職員の二人。

松林さんは、昭和五十八年から勤務しているが、図書館建設にあたっては、「自分達の希望も随所に取り入れてもらいました」と振り返る。コンピュータへの入力作業も、平常業務のかたわら済ましたというから、新館オープン時における苦労もまたしのばれる。

この外、図書館では「読書会」の育成、子ども達を対象とした「遊トピア塾」の取り組みなど、町民の中に根ざした活動も継続されて好感がもてる。

ちょうど、二階の展示ホールでは町内の書道展が行われていたし、常設の歴史資料室には、近くの遠崎・十萬遺跡からの出土品が展示されていた。特に遠崎遺跡からの弥生前・中期の出土木製品は、四国で一番古いとされ、二千年以上の太古からのメッセージが聞こえて来るかのようだった。



中平 清著

「クモのふるまい」(私家版)

県内の書店の書棚に数多くの郷土出版物が見られるようになったのは、ここ十年程前からのことである。

いずれにしても、歴史・民俗を除けば、郷土の自然見直しのものも多く、動植物をはじめとして景観などの探訪や花巡りに、コンパクトな案内書のようなものになっている。

そんな中であって、郷土本コーナーの一隅に装丁や内容も一見まことに地味な『クモのふるまい』がある。クモは普通には嫌われている動物であるが、この本を開いてみると、活字は大きく、行間はゆったりとあり、所どころにクモの生態写真が入っていて、これは何クモがどうしているのだろうかと思いを誘われる。

目次の「クモの鳴き声」を拾って、本文を読んでみると、音を出すクモが広い世の中にはいることを知らされる。文は平明を極め読みやすく、興味はつきなく、飽きることがない。身辺のクモに関する生態を科学者の目で凝視し、博物学者の視点から

様々の角度で考察した記録である。この本を読んでいくと、著者は明らかにクモと対話していて、そのイト(糸+意図)の引き出しに成功し、臨場の感動を即、伝えているので見逃しができない。

クモ嫌いの人でも、クモを見てみようという気持ちになるような本である。クモがどんなに人間生活に近い生物であるかも知られる。続刊の『続クモのふるまい』(私家版)『白帯日記』(私家版)と観察記録を提示して、生物との共生のあり方を示唆しているように思われる。



西谷 退三訳

「セルボーンの博物誌」

(八坂書房)

セルボーンはロンドンの西南約百キロメートルにある村の名前である。

この土地に生まれた聖職者ギルバート・ホワイトが五十年代から六十年代

後半にかけての二十年間に二人の友人博物学者に送った郷土自然誌が書簡体で綴られ、文体は聖書に似た読みやすさである。

内容は動物のカメ・クモ・トンボから始まってミミズ等々と多種にわたる。この間、地質・気候の分野も含まれ、特にカモを始めとする野鳥観察が多く、野鳥記といった感じがなくもない。

この博物誌はイギリスで発行されて以来、今では百五十種位が刊本になっているといわれ、日本では西谷退三外二名によって翻訳されてもいる。この度の退三訳本は装い新たに甦った。

訳者、西谷退三は明治十八年(一八八五)佐川に生まれ、昭和三十二年(一九五七)七十一歳で佐川に没し、ホワイトと同じく妻を持たない生涯を通しての。

原本と翻本の間に違和感が全く感じられないことで、原作の意図は十分に果たされていると思われる。註の一字一句に至るまで簡明で、よくあるわずらわしさは一切ない。

この本もまた、今後、人類が生き続けていくために、自然とどう関わっていったらよいかを示している点で訳者の労は不朽といつてよい。

(恒石直和)



第7回高知の映像コンテスト入賞作品

高知を撮る 公園通り 中井 秀夫

「わっ、今日のパンツ素敵じゃない!」こんな若やいだ声を背後に聞き、思わず振り返る。もちろん彼女たちは、往年のオジサン、オバサンたちが想像する下着のパンツを言っているのではない。「スラックス」の素敵さをほめていのである。

木綿とメン



風俗歳時記

「ま、いじや、一枚くれ」(朝日新聞)いわせてもらおう『一九九一・一一・二二』

丸 いくらの言葉の移り変わりが激しいと言っても、「木綿」と「メン」が同義語だということまで分からない時代になっているのだろうか。(晋)

「は、ズインズ、」普段着は「カジユアル・ウエア」となって、古い言い方は野暮ったいものになってしまった。ことばは生きもので、時代とともに変わるの当然である。だが次のような話になると少々とまどってしまう。先頃の新聞に紹介された話である。

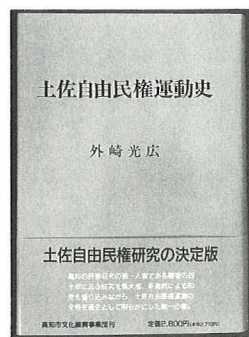
「ハイ」と女店員。デパートでハンカチを見ていたら、中年の男性が「木綿のハンカチ欲しいんだけど、ここにあるのは木綿なの?」と、若い女店員に聞きました。店員は走って確かめに行き、「お客様、これは全部メンのハンカチなんですけど」。男性客は困ったように、「メンかあ。木綿とは違うの」と言つと、

好評発売中!

土佐自由民権運動史

外崎光広著 A5・上製本・424頁・定価2800円(税込)

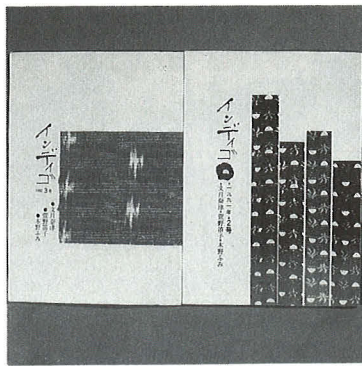
高知県における自由民権研究の第一人者、外崎光広の最新刊。著者の40年にわたる研究を集大成、新資料による見聞も盛り込み土佐の自由民権運動の全容を通史として明らかにした決定版。



やらないよりはやった方がいいと  
菅野 笛子

### 詩誌「インディゴ」

名前とか作品とかは知っていても実際会ったのは一回とか二回なのに、心で濃密に会ってしまった。そんな人が世の中には結構いるもので、何かで偶然出会うのだけれど、会うべくして会ったと後で思えてくる。私たちトリオもそんな出会いであった。



二号に文月が書いているように、「大江満雄詩碑建立を祝う会」の帰りに、三人が出口で初めて逢って、大橋通りの「皇帝」でコーヒを飲みながら決めたのだ。やらないよりはやった方がいい、と言う少々抽象気味なこと。文月が「インディゴ」(暗青色の染料「藍」を提案。洗えば洗うほど色が冴える藍染めにちなんで、時に洗われ、人の目に洗われ冴えて美しくなる、「詩」への思いを込めて。毎号好評の表紙は明治生まれの千葉あやさんの緋の織物の本を菅野が持っている。

版画芸術の普及をめざして  
山中 雅史

### 「高知版画協会」

高知版画協会は、高知県内で活動している版画作家と手漉き和紙並びに美術関係者が、故日和崎尊夫氏を中心とした呼びかけに第一回高知国際版画トリエンナーレ展をきっかけに集まり、版画芸術の普及と若い版画作家の育成を目的として一九八八年に発足しました。

会員は、銅版(エッチング等)、木版(板目木版・木口木版)、リトグラフ(石版)など多種にわたった技法を用いて自己の芸術を追求しています。

活動の内容ですが、年一回の協会展を中心に版画研修や講習会、一般を対象にした版画教室などを開いています。また昨年は「四国はひとつ」の構想のもと、愛媛・陽版画会との合同版画展を七月に愛媛県立美術館で、十月には紙の博物館で開催し、県内外から多大の反響と成果を収めました。そして十一月には土佐和紙国際化事業の一環として、土佐和紙アメリカ展(ピーボデ



全国大会をめざして  
飯谷 哲郎

### 「高知ファミリコーラス」

高知ファミリコーラスは、小津高校合唱部OBが中心となり、昭和五十一年に結成されました。

きっかけとなったのは、同校出身のピアニスト山崎晶子さんのかつてのドイツ留学に際して、小津高校の仲間と門出を祝ってコンサートを開いたことや、その後同校OBで国立音大出身の音楽家福田俊樹さんが帰郷し、よびかけを行ったことなどで、当初から五十名近い仲間が集まりました。

指揮は小津高校で十三年も音楽を教えてこられた土居敏秀先生があたってくれ、今日に至っています。現在メンバーは四十名弱、高校生から五十代まで、平均年齢は三十歳を割っていると思われ、男性より女性の方が多くて倍近く、職業をみても会社社員、保母、教員、主婦、さらには学生とさまざまですが、それぞ



心身ともにリフレッシュして  
田村 利恵

### 「ダンシングビーンズ」

ダンシングビーンズは、昭和五十八年度、高知市青年センター主催のジャズダンス教室がきっかけとなって、同年十二月に発足したサークルで、当初は講師として、スガジャズダンススタジオのインストラクターにお願いし、指導して頂いていたのですが、現在は、宮本順子先生に毎週月曜日(午後七時半～九時半頃まで)指導して頂いています。メンバーは十五人で、最初はストレッチから行い、コンピネーション、ステップとリズムにのって体を動かすという事は、心身ともにリフレッシュしてとても楽しいのです。先生を中心に温かいのんびりした雰囲気、どなたでもすぐとけ込んで頂けると思っています。

日頃は、地道にレッスンをしています。が、青年センターの文化祭や成人式等では、踊りを披露したり、また夏のよさこい祭りでは、踊りの指導をする等、青年



て、それをベースに木野がレイアウトして年二回、一人六ページ。あとがきは三人で書く。一九九一年七月創刊。高知の女性詩誌として、ある意味ですき間を埋めるものになればという自負もちょっぴりあって。

日常に人の温もりを探す文月。事物に命を吹き込む魔術師木野。過去に足をすくませ異界をさ迷う萱野。トリオのハーモニーはかすかでも確かでありたいけれど。

連絡先 高知市五台山四九三三小松方  
電話 〇八八八―八三―三九七

連絡先 高知市新本町一―二―三  
高知版画協会事務局  
電話 〇八八八―三二―三三三

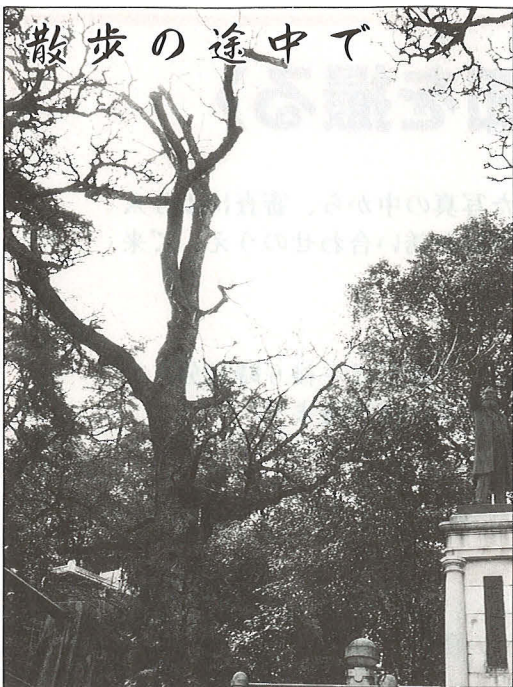
れどこかで合唱などをやったという経験者が多いのも特徴です。

活動は年一回の定期演奏会、今年は十八回を数えますが、六月三十日に県民文化ホールで行います。

連絡先 高知市横浜新町三―二―〇二九  
電話 〇八八八―二二―六三三

団としての活動もしています。

連絡先 高知市青年センター内  
電話 〇八八八―三二―四九三



### 散歩の途中で

追手門をくぐる。板垣退助の像の後ろでじっとこれを見守るかのよつな一本の大きなセンダンの木がある。センダンはうす紫の花を咲かせる。秋から冬にかけてはきれいな黄色の実をつける。センダンの木は、かつて土佐では旅人達のために街道などに植えられ、この花の風土の中で生まれ育った土佐の人びとには、特に愛着のある木といえるが、次第にその数も少なくなっているのはいかにも寂しい。この樹、樹高二五メートル、樹齢約二百五十年といつ。

### 風伯

### 知事のネクタイ

着こなされているので、ご本人も自信があたりだろう。

ＴＶでたまに拝見するだけだが、エルメスを着用されているときがある。それから判断するに、知事のワードローブに地元で求められたネクタイはほとんど無いだろう。

高松市などと違って高知にはエルメスの

デザインや色調からそれとわかるブランドのネクタイが幾つかある。例えばG・アルマーニ、ドミニク・フランス、そしてエルメスなど。

橋本知事はその服装センスも高く評価されているが、ライトグリーンや黄色系統など、日本人には合わせ難いネクタイもよく

専門扱店が無い。どのようなルートかは知らないが、ブティックなどで時たまごく少数を見かけるが、品揃えはわずかなものだ。毎年恒例行事で橋本知事はデパートの一日店長としてネクタイ売場に立つが、そこでは知事の求めるに足りる品は無いだろう。

かつての氏原高知市長は出張の前に市内の店で煙草をまとめて買って行った。煙草は全国どこでも同じだが、ファッションに関してはそうはいかない。知事に、好みには目を塞いで地元ネクタイを締めるというのは不粋な田舎モンロー主義だろう。

(南北)

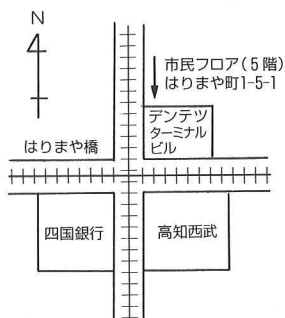
# 〈写真展・高知を撮る〉

第9回高知の映像コンテストに応募された写真の中から、審査により入賞した写真の作品展を開催いたします。皆様お誘い合わせのうえ、ご来場ください。

日時 3月17日(水)～3月22日(月)  
\*午前10時～午後6時(土曜・日曜日は午後6時30分まで、  
最終日は午後5時まで)

場所 高知西武2階 特設会場  
主催 (財)高知市文化振興事業団

お申し込み  
☎ 73-4365  
(財)高知市文化振興事業団



所在地 高知市はりまや町一  
ミナルビル5F

広さ・内装 96㎡壁面布クロス張り、  
スポットライト完備

市民フロアのご利用を  
展示や会議に最適!

## 賛助会員募集中!!

会費 年2,000円(前納)  
特典 ① 機関紙「文化高知」を年6回お手元にお届けします。  
② 事業団発行の出版物の10%割引(一部例外あり)  
③ 主催事業や刊行物の案内(マスコミ利用の場合あり)  
[※上記特典は申し込みいただいた日から1カ年有効]

お申し込み ①郵便振替 ②現金書留 ③直接事業団へ…

いずれの方法でもけっこうです。